

市民俳歌柳壇

歌壇

安野登美子 選

夕光にゆれて散り積むもみぢ葉のはかなき感触靴底にあり

●選評 夕日の光に散りつぎ、積もりしもみぢ葉の中を歩む。踏みたえなきもろき感触は、心奥にまで這い上がったであろう。この研ぎ澄まされた感性を賣いたい。結句「靴底にあり」に消えない余韻を感じ、晩秋の寂しさが心に染みこくる一首である。

羽衣の如く花びら陽に透けて
皇帝ダリア風雅に咲けり

●選評 緑2丁目 片嶋 青水

あらたまの年のはじめの驕りとて
ピアノ詩人のシヨパンに酔はむ

●選評 双葉1丁目 大島 志朗

はらはらと落葉舞ひ散る師走なり
平成の文字の別れ寂しむ

●選評 陽東6丁目 原子 吉彦

木の葉散り切り立つ岩に一筋の
滝があらはれ朝日に輝く

●選評 江曾島4丁目 今井 立子

細谷町 平野フミ子

俳壇

星田一草 選

採石場傷跡さらし山眠る

●選評 クリスマス前夜、子どもたちによって演じられる聖夜劇。親にとっては上手に演じられるかどうか気が掛かり。普段のやんちゃぶりとは一変し、緊張しながらも見事に天使役を演じきったことだろう。安堵感にはほほ笑む親の優しい姿が見えてくる。あるいは、孫の様子を案ずる祖母の姿かとも想像できる。

雲台に翹たたみ赤とんぼ

●選評 江曾島町 長谷川 昇

石井町 吉澤 伸人

輻輳の綾をほぐして冬銀河

●選評 弥生1丁目 大河原信昭

自転車に空気満タン春を待つ

●選評 江曾島5丁目 細川 清

柳壇

荒井宗明 選

正月や恐い秤の目となりぬ

●選評 正月も、昔からするとだいぶ様変わりをした。正月にするお飾りが少なくなったと思ったら、おせち料理も省略されていると聞く。こちらは、太ることを敵としている女性の意向が強いと言っが、古歌にも「日の本は、遠き神代の昔より、女ならでは夜の明けぬ」とあり、女性社会の現出が近いのかも。

信じてはいないが囁く恵方巻

●選評 城東1丁目 綱川 光江

大根の白き勝手も寒に入る

●選評 中岡本町 中沢 智子

古里の囲炉裡へ急ぐ寒の月

●選評 水室町 関 ふさ子

六度目の猪歳へ牙を研ぎ直す

●選評 平松本町 鶴牧美佐子

うつのみやの歴史を紐解く物語

第10回 農村に生きた人々が築いた その1 文化豊かな田園の地 うつのみや



■宝木台地の開拓 江戸時代の初め、田川の西側にある宝木台地は、水持ちが悪い地質のため稲作に適さない土地でした。宇都宮藩は、この台地を、江戸の町人加藤四郎兵衛ら4人に請け負わせ、開拓させました。しかし、水利が悪かったため、次第にこの新田は荒廃してしまいます。

■二宮尊徳による通水事業 文政8年(1825年)、宇都宮藩は、荒廃した新田へ田川から通水することを計画しますが、この取り組みは失敗に終わり、藩は真岡代官所を通じ、二宮尊徳に通水工事を依頼します。嘉永5年(1852年)、尊徳は2回の現地検分を行い、工事に着手し、石那田堰を設け、徳次郎村の田まで水を通すことができましたが、その南に位置する西原新田までは及ばませんでした。そこで、仁良塚の名主らが中心となっ

て資金を集め、徳次郎用水の取水口からの開削工事が始まりますが、工事監督者である尊徳が途中で死去し、いったん工事は取りやめとなります。その後、尊徳の弟子の吉良八郎が後を継ぎ、安政6年(1859年)に「宝木用水」は完成します。こうした長年に渡る地域の人々の努力により、宝木台地の多くの田が潤い、豊かな田園の地が生まれたのです。

■新川の誕生 また明治時代には、宝木用水から分水して江曾島まで流れる用水が完成し、「新川」と名付けられました。この人工の川は、現在でも農業用として一部使われている他、雨水を処理する排水路など、市民に身近な川として流れ続け、春には桜の名所として市民に親しまれています。

☎文化課☎(632)2764



新川の桜並木

●俳歌柳壇 応募方法 1人に付き俳句3句、短歌3首、川柳3句以内。対象は市内在住の人で、未発表作品に限ります。はがきに、作品(漢字にはふりがなも付けて)・住所・氏名(ふりがな)・応募する壇名を書き、毎月20日(消印有効)までに、〒320-8540市役所広報広聴課へ。俳句・短歌・川柳の併記は不可。市内に在住か通学している小・中学生からも応募をお待ちしています。☎広報広聴課☎(632)2028